

日本特別掃海隊

— 元山沖における MS14 号の触雷と前線離脱 —

元 2 掃隊指揮官 海兵 55 期 能勢 省吾

(編集部記：本稿は、朝鮮戦争当時、海上保安庁第 5 管区海上保安本部航路啓開部長の職にあり日本特別掃海隊の第 2 掃海隊指揮官として元山沖の掃海に従事された能勢省吾氏が、昭和 53 年 11 月に当時の状況を述懐し書き記した防衛研修所資料を元としている。

能勢氏が記された内容の一部に史実と異なるところや不明確なところがあったため、編集部としては、当時の関係者からの聴取と文献調査による掃海史実調査に基づき注釈を加えて再編集することとした。

なお、能勢氏は、元山沖掃海の直後海上保安庁を一時解雇されたが一年後に復職、その後海上自衛隊に入隊され防大訓練部長、横須賀地方総監部副総監等を歴任、昭和 34 年に退官後、横須賀市議会議員として活躍された)

平成 24 年 9 月 1 日

掃海 OB 等の集い 世話人会

はじめに

私は旧海軍においては航海術を専攻したので、主として各種艦艇の航海長の職務をすることが多かったのであるが、大東亜戦争の終結による海軍の解体と共に従来経験したことがない掃海業務に従事することを命ぜられ復員省員となり、朝鮮戦争の勃発により朝鮮の元山まで出動する破目に陥入り、かつ珍しい事件を起こしてしまった。俗に元山事件と称している。

この朝鮮戦争に出動した日本特別掃海隊の事件について理解するためには、戦後処理として米占領軍の命令によって実施された日本掃海部隊による国内の掃海作業が、大いに関連している。初めに国内の掃海作業について概略を説明した後、朝鮮戦争に参加し、かつ、元山において引き起こした事件についてその事実をありのままに陳述することとしたい。

昭和 20 年 8 月、日本が遂に米国に降伏した当時、それまでに行われた米軍の機雷による日本封鎖作戦によって、我が国の食糧や物資等の輸出入は途絶し、国民の食糧や生活必需物資は欠乏して、我が国民は将に飢餓に直面していたので、終戦となって、先ず第一に必要なことは、食糧をはじめとする国民の生存に必要な物資を輸入することが我が国にとって緊急の問題であった。そのためには、米軍の敷設した機雷を速やかに排除して船舶の各港への出入りや航行を安全にすることが、我が国にとって一日も早く実施しなければならない緊急かつ重大な問題であったのである。

この問題に取り組んで、機雷排除のために危険と困難を顧みず掃海の大作業を敢行したのが、元海軍大佐田村久三氏を最高指導者とする日本掃海部隊であった。米占領軍の命令によって日本掃海部隊は、直ちに行動を開始したのであったが、掃海作業そのものは、非常な困

難と危険を伴うものであると共に長年月を要するもので、戦後30年以上を経過した今日も細部の海域においては、今なお海上自衛隊によって、この掃海作業が続行されているのである。

そのために尊い犠牲となった人は、終戦後77名の多数に及んだのであった。この掃海作業中の昭和25年、朝鮮戦争が勃発し、占領軍命令によって、日本特別掃海部隊は先ず最初に朝鮮の元山及び仁川方面等に出動したのであった。

最初に出動して元山における掃海作戦中に惹起した我々の事件、或いは掃海部隊が朝鮮に出動したことについては秘密扱いとなり、当時一般社会には余り知られていなかったが、報道関係者の間にはその真相を調査しようと努力し、また国会においても質問が行われ問題になりかけたこともあったが、その都度平和的に行われた通常の掃海作業であったとして片付けられてしまった。更にはその真相を確かめるために、既に退役していた当時の国連軍司令官マッカーサー元帥に対して質問状を寄せられたこともあったが、彼は「元山における日本掃海部隊は良くやった(WELL DONE)」という最高の讃辞をもってこれに答えてだけで終わった。元山における日米掃海部隊の事件は全般から見れば小さな事件であったけれども、その影響する処は大きく、国連軍の元山上陸の大作戦を失敗に終わらせる結果となり、またその経過においては疑問や教訓を多分に含んでいたと思われるのである。

爾来、既に長年月を経過しているけれども、再び起こることもないと思われる珍しい事でもあり、修飾も粉飾もなく、かつ分かり易く一般向けに陳述して参考に資せんとする次第である。

朝鮮に派遣された特別掃海隊総指揮官田村久三氏や同隊の第1掃海隊指揮官山上亀三雄氏共に今は亡く、太平洋戦争後に行われたこれら掃海大作業や朝鮮戦争に参加した事実等を、後世のために書き残しておくことが必要であると信じ、当時海上保安庁の第5管区海上保安本部航路啓開部長であり、かつ、朝鮮に派遣された特別掃海隊第2掃海隊指揮官でもあった私が敢えてここに筆をとった次第である。

昭和53年11月 記述者 能勢省吾

1 機雷とその掃海について

(1) 機雷の種類とその掃海法

過去の海戦において機雷が縷々大きな効果を発揮したことは世界の海軍戦史の上でも有名である。大東亜戦争が開始されるまでの機雷は係維機雷と称し、爆薬を装填した丸い缶体を海水面下の水中に浮遊させ、これを係維索によって海底の錘量に結びつけたもので、艦船がこの缶体に当たるとその衝撃によって爆発する仕掛けになっていた。この機雷を海中に敷設するときは、艦船の船底で衝撃爆発するように船の喫水線内の深さに缶体を浮遊させてあった。また敵の潜水艦に対して敷設するときには潜水艦が潜航してくる深さに缶体を浮遊させて敷設したのである。これらの機雷を多数並べて味方の港湾の出入口、或いは水道や海峡等に機雷堰として敷設して敵の侵入を防御し、或いは敵地に隠密に敷設して敵艦船を爆破しようとする作戦に使用されたのである。

従って、もし我が国の沿岸等に敵が機雷を敷設したり、又は敷設する虞がある場合には、味方にとって危険であるのでこれを排除しなければならない。機雷を排除処分しようとする時は、軍艦で、又は喫水の浅い掃海艇2隻をもって対艇となり、強力な特殊ワイヤーを水中に曳航しながら航走して機雷の係維索を切断すれば、機雷の缶体はその浮力によって水面に浮上してくるので、これを銃撃によって爆破又は海底に沈め、或いは他の方法で直接爆破するのであるが、このように敷設されている機雷を排除処分し海中を清掃する作業を「掃海」と言った。

日露戦争において機雷作戦が大きな成果を挙げて以来、日本海軍においてはこの係維機雷の型式以上に進歩発達することなく、大東亜戦争にも我が海軍においては専らこの係維機雷が使用されていたのである。

ところが大東亜戦争の後半に入ってから、米軍の B-29 爆撃機や潜水艦によって、日本沿岸に投下敷設された機雷は、従来なかった新型の機雷であって、日本海軍としては初めて直面したものであった。従って我が海軍としては当初極めて当惑したのであったが、投下された機雷を、早速陸上や浅海面で揚収しこれを分解、研究して初めて対策を立てねばならなかったのである。

新型機雷のうち最も多く敷設されていたのが地球磁気を利用した磁気機雷であった。これは鉄製の船体が航行する時、地球磁気を攪乱して行くので、その攪乱が海底に鎮座している磁気機雷に作動して爆発する仕掛けになっていた。そこで我が海軍ではこれを掃海する方法として、揚収した米海軍機雷を分解していろいろ研究の結果、鉄分の少ない木造船を掃海艇に採用し、2隻の掃海艇をもって対艇となり、両艇の間に網のようになった電線を水中に曳航し、この電線に強力な電流を通すことによって地球磁気を強く攪乱することとし、海底に磁気機雷あれば、この網のところで爆発させ処分する掃海方法を開発したのである。

この磁気機雷の外、機雷の種類には船の推進器の音に感应して爆発する音響機雷、或いは水圧を利用する方式と磁気機雷とを組み合わせた磁気水圧複合機雷等があったが、これらは比較的少数であった。音響機雷に対する掃海の方法としては、音響爆弾を海中に投下して爆発させ処分することとした。これらの新式機雷を感应機雷と称した。

これら感应機雷に対する掃海には従来の鉄製の掃海艇では被爆するので全部役に立たなくなり、戦時中に急造して対空、対潜のために配属されていた木造の哨戒特務艇（約 230 トン）と駆潜特務艇（約 130 トン）を急速磁気掃海艇に改造して新たに掃海部隊を編成し、早速米軍機雷の掃海を開始したのであったが、余り成果を挙げないうちに、間もなく終戦となってしまった。

ところが、その後行われた終戦後の磁気機雷掃海には非常に困難と長年月を要したのである。従来型の係維機雷に対する掃海ならば所要の海面を一回、万遍なく掃海すれば、完全に掃海されたことになるのであるが、米軍の磁気機雷には回数起爆装置というのが取り付けられていて、その機雷の上を一回完全掃海したのでは爆発しないで残存するような装

置になっていた。しかも爆発停止は一回に止まらず、この回数起爆装置を何回かけるかによって、その回数だけ同じ海域の完全掃海を繰り返さなければならなかったのである。終戦後の米軍資料によれば、米軍の敷設した機雷にはその敷設した場所によって、この回数起爆装置を2回から最も多いのは12回もかけられた磁気機雷があったので、それを掃海するためには敷設海域によっては完全掃海を12回も繰り返さなければならなかった。従って掃海所要日数も12倍を必要としたわけである。従来の掃海の観念からすれば、まことに長年月を要したのであって、終戦後の米軍機雷に対する掃海作業が、いかに長期を要したかということが領けられることと思う。

加えて磁気機雷は、米国において開発されて以来の日数が少ないために、諸種の実用実験を行う暇もなく実戦に使用された経緯もあり、終戦後の掃海においてデータが不足していて、長期の掃海計画樹立や見通しが困難であった。例えば海中に敷設された磁気機雷が腐蝕して自滅するまでに何年を要するかなどは全く不明であり、現実には米海軍の予想より遙かに長期にわたって作動可能の状態が持続されていたので、掃海作業も益々長期にわたって継続しているのである。

(2) 試航船について

掃海作業の実施において特に重要なことは、掃海を終了して航行の安全を宣言する場合に、もし1個でも機雷が残存していて船舶に危害を加えるようなことがあってはいけないので、未掃面を残さないことが絶対に必要であった。そのために掃海艇は、掃海運動中、六分儀をもって艇の位置を綿密に確認しながら運動して遺漏のないように努めたのである。

更に掃海の成果を確認するために、戦後の掃海において、米海軍から試航船及び試航筏を速やかに準備して就航せしめるように指令してきた。試航船とは掃海終了海面に船として最初に進入し、その海面を万遍なく航過して残存機雷の有無をテストするための船で、もし残存機雷がある場合にはその爆発を自らの船体に受けて被爆船となるための船として計画されたものである。従って、その効果を大きくするために船体に電線を巻いて強力な電流を通し、地球磁気を攪乱し得る幅、即ち機雷を爆発させるための有効幅を拡大し、又船体内は幾つかの隔壁を設けて被爆してもなるべく沈まないように工夫してあった。米海軍としても磁気機雷の掃海は初めてのことであり、こういう着想が浮かんだものであろう。この試航船は機雷の爆発に立ち向かう最初のテスト船であるので、米海軍ではその愛称を「ギニアピッグ」(モルモット)と呼んだ。

戦後の我が国の掃海において試航船は4隻準備され、私もそのうちの1隻であった「東亜丸」(約1万トン)に乗り組んで約10ヶ月近くの間、試航作業に従事したが、触雷したことは一度もなく、掃海艇による磁気掃海は確実に行われていたのである。

ただし、他の試航船が磁気掃海を終わった区域の試航を実施中、その外側近くを航行して区域外でしかも近距離にあった機雷に影響を与えて爆発させ、そのために船底を破損した例が一回あっただけである。

試航筏は、やはり同じ目的をもって設計され組み立てられて使用されたけれども、その

成果が余り思わしくなかったため、間もなく途中で中止されることになったのである。

2 終戦後の掃海大作業の経過概要

(1) 占領軍命令による掃海作業の開始

昭和20年8月15日、太平洋戦争が日本の降伏によって終結した時、占領軍が日本に上陸占領しようとするに当たって、国連軍最高司令官マッカーサー元帥から、占領軍一般命令第1号が日本に対して公布された。日本占領に関する最初の命令で、占領の基本事項を網羅したものであった。

その中に「日本国大本営は連合国最高司令官に対し、一切の機雷、機雷原、その他の陸上、海上又は空中の行動に対する障害物の位置及び施設状況並びにこれに関連する安全通路に関する安全、かつ、詳細なる地図付き情報を提供すべし。また責任ある日本国及び日本国の支配下にある軍及び行政当局は、一切の日本国の機雷、機雷原、その他の陸上、海上及び空中の行動に対する障害物は、何れの位置にあるを問わず連合国最高司令官の指示に従いこれを除去することを保障するものとする」という意味の項目があった。引き続き発布された一般命令第2号及びその後の日米海軍間の折衝において、これらの作業を実施するための指揮系統、責任の所在、運用方法等必要事項が逐次指示された。

当初太平洋戦争を開始するに当たって、日本海軍は敵の侵入を防ぐために、日本沿岸の各水道や港湾の入口、或いは海峡等に係維機雷を多数敷設した。

戦争の後半期になって日本の空襲が可能になると、米軍は更に日本の港湾を封鎖して食糧や必需物資の輸入を阻止する作戦を企画し、そのために新たに開発した感応機雷をB-29爆撃機や潜水艦によって、日本の沿岸や瀬戸内海等各主要な港湾に多数敷設した。その結果、日本の海上交通は殆ど途絶し、僅かに満州より国民の食糧を輸送していた船も日本海沿岸の港が全部封鎖されたため、遂に運航不能となり食糧の輸入さえも止まってしまったのである。従って終戦時、国民の食糧を始め生活必需物資は欠乏逼迫していて将に国民は飢餓に瀕していたのである。国民の生存に必要な食糧や物資を即刻輸入するために、一日も早く日本沿岸の航路を開いて船舶の安全運航を図ることが、国民の生活と生存をはかり、ひいては日本の復興のために、終戦処理作業として緊急、かつ、重大な問題であったのである。

日本海軍としては、機雷の専門家であった田村久三元海軍大佐を最高指導者として機雷関係のスタッフを揃え、米海軍司令部との折衝を続けながら占領軍の指令する掃海作業の準備に着手した。先ず掃海艇の整備を行うと共に、当時解散しつつあった海軍軍人の中から人員の補充確保に努め、全国各地に所在する掃海関係船艇合計360隻、人員約1,900名をもって新たに掃海部隊を編成して昭和20年9月から10月にかけて、占領政策のために一時中断されていた掃海作業が再び開始された。米海軍より敷設機雷の資料を入手して、占領軍命令による計画的掃海作業として大々的に開始されたのである。

日本海軍が敷設した係維機雷は、全国で約55,000余個、米軍の敷設した感応機雷は、約

10,700個の内、残存していると推定される6,500余個を対象として、旧海軍軍人をもって編成された掃海隊員が、その使命を自覚して、風浪を乗り越え、寒暑に抗し、非常な困難と危険に直面しつつも、戦後の個人生活を犠牲にしながら、日本再建を目指して、この重要な掃海作業に敢然として取り組んでいったのである。

(2) 従来方式の係維機雷に対する掃海

日本側で敷設した係維機雷に対する掃海は、日本海軍の掃海艇や海防艦をもって掃海隊を編成し、日米海軍が協力しながら各々区域を分担して、昭和20年9月中旬頃から旧来の方法によって掃海作業を開始し、昭和21年8月には係維機雷の掃海を終了したのであるが、その間尊い犠牲となった人は40名以上にも達し、触雷沈没した艦艇は、海防艦7隻、掃海艇2隻、敷設艇1隻、掃海特務艇1隻、重油船1隻の合計12隻に及んだのであった。

(3) 新式の感応機雷に対する掃海

米軍の機雷は、下関海峡を重点として瀬戸内海方面に最も多く敷設され、次いで日本海沿岸の各港湾及び太平洋沿岸の重要港湾等に敷設されていたので、掃海作業も瀬戸内海方面に最も重点を置いて、全国掃海隊の全力を挙げて作業が開始された。

老朽化した木造の掃海艇を駆使して危険と困難を伴いしかも地味にして綿密な作業を連日辛抱強く繰り返しながら、掃海隊員は敗戦の中から平和日本の再建という高い使命感に燃えて、必死の努力を傾倒していったのである。

こうして昭和22年末頃までには瀬戸内海の一貫航路や、これから内海沿岸の主要港湾に至る出入港航路及びその港内、あるいは太平洋沿岸及び日本海沿岸の主要都市に至る出入港航路や港湾内等の掃海が逐次完成されて、一部船舶の航行が可能になり物資の輸送が行われるようになると、国民生活や産業の復興に光明を与えて、国内の総てが活況を呈していったのである。

なお、また、この頃ソ連製浮流機雷が日本海沿岸から津軽海峡方面にかけて多数漂着するようになり、中には沿岸で爆発して民家や漁民の被害あるいは死傷者を出すようになつたので、特に事故の多い冬期には、浮流機雷の漂着する数も多いので、浮流機雷対策の作業も併せて実施しなければならなかった。

3 掃海関係機構、人事の変遷

終戦時の占領軍命令によって、日本側は終戦前から活動していた海軍掃海部隊を主体として、戦後の掃海部隊を新たに編成し、機雷の最高専門家であった田村久三海軍大佐が掃海の最高指導者となり、米軍との連絡を密にしながら掃海作業を指導することになったことは前述のとおりであるが、終戦と共に海軍省軍務局に掃海課（後に掃海部）が設けられ、地方においては各地に掃海部または掃海支部を設けてこれらに掃海隊を付属せしめて地域ごとに掃海部隊を編成し占領政策によって一時中止されていた掃海を現地米海軍指揮官の指示に従って地域ごとに9月中旬に再興し、10月からは掃海全般の組織機構を整えて占領軍の指令による掃海大作業が、改めて開始されたのである。

爾後、この掃海作業は政府機構の変遷に従ってその機構所属を変転し、海軍省より第2復員省、復員庁、運輸省海運局、海上保安庁とその所管が変わっていった。その後保安庁、次いで海上自衛隊が創設されるに至って掃海業務はそれらに受け継がれ、現在なお海上自衛隊がその業務を引き続き執行しているのである。

掃海業務に従事した関係者は旧海軍軍人を以て編成されていたが、その身分は国家公務員たる復員事務官、運輸事務官、海上保安官と変わっていった。昭和21年2月28日、旧軍人の公職追放指令があったにも拘わらず、掃海作業実施の必要上掃海関係の旧海軍士官だけは公職追放から除外されて業務を続行した。

昭和23年5月1日、運輸省内に海上保安庁が創設されて、掃海関係はその管轄となったので、掃海関係者は海上保安庁に編入された。昭和25年6月に至るや占領軍の指令により、それまでの掃海作業に加えて海中の爆発物件や陸上所在の機雷の処理作業等をも管掌することとなったので、海上保安庁内の組織を改め新たに航路啓開本部が発足して、これらの業務を処理することになった。

同年8月に至って、公職追放の一環として航路啓開関係者のうち旧海軍将校を解任するという指令が、占領軍から出されて掃海関係者に動揺を与えることになった。しかしながら米国極東海軍司令部としては、日本掃海部隊の優秀性や重要性を充分認識していたので、米国海軍作戦部と共にGHQの政治局に対して追放の緩和について非常な努力をした結果、間もなく解任の時期を10月末まで延期されることになった。

ちょうどその年の6月、勃発していた朝鮮戦線は、釜山地区に追い詰められた国連軍及び韓国軍が反撃に転じようとしていた頃であった。その反撃作戦の一環として、朝鮮における掃海の問題が起こったのである。

4 朝鮮戦争に出動した日本特別掃海隊の実施経過

(1) 朝鮮戦争の勃発

朝鮮半島において南北朝鮮の間に続いていた緊張状態が破れ、昭和25年6月25日、北朝鮮軍は突如として南北朝鮮の国境線を突破して南鮮に侵入を開始した。韓国軍及び国連軍は薄弱な防御線をたちまち突破されて、各地で相互の連絡を遮断され混乱に陥り、後退に後退を重ねて遂に釜山地区に追い詰められ、ようやく橋頭堡を築いて戦線を固定したが8月末頃のことで、その後この戦線で両軍は攻防を繰り返していたが、9月15日アーモンド少将の率いる米国第10軍が、突如として朝鮮西岸の仁川に上陸、反撃に転じ北朝鮮軍の背後を脅かすに至ると、補給路を遮断された北朝鮮軍は総崩れとなって北方に向け敗走を始めた。国連軍は破竹の進撃態勢を以て、朝鮮半島の西側は京城付近に東側は元山方面に進出しつつあった時である。

(2) 全航路啓開部に対する緊急指令

私は昭和25年4月から海上保安庁第5管区（神戸）海上保安本部航路啓開部長として、大阪市内目抜き淀屋橋近くの事務所で勤務していたが、中央の状況や朝鮮戦争の状況等

は新聞によって知る以外は何も知らなかったのである。

秋の晴々とした昭和25年10月2日のことであったと記憶するが、東京の田村航路啓開本部長から電話がかかってきた。本部長の直接電話ということは滅多にないことだったので何の重要用件だろうと思って電話についてみると、田村本部長の声で「朝鮮海峡の浮流機雷の掃海をやることになったから、君も指揮官として行ってくれないか」ということである。ちょっと考えてみて冬季行われている浮流機雷に対する普通の掃海であろうと予想し、別に躊躇する理由もないと思ったので「そうですか。御命令とあらば行きましょう」と直ぐに返事をしたのであった。引き続き出動可能の掃海艇を至急準備して下関港に集合せよとの指令を受けたのである。

ちょうどその頃、部下の掃海艇3隻が大阪湾の掃海に従事していたが、直ちに掃海を中止して掃投し、準備でき次第下関に急航するよう指令したのであった。自分も直ちに出発準備にかかり、一日も早く下関に到着したいと思って10月3日の特急に乗車、大阪駅を出発、下関に向けて単身急行したのである。大阪駅には航路啓開部の職員多数が見送ってくれたが、あの時の感激は今でも忘れられない。万歳の声に送られてあたかも出征にも似た出発風景であった。女子職員が僅かの梅干飴を贈ってくれた気持ちがとても嬉しかったが、それがあとで幾日も続いた荒海の航海中でとてもよい慰安となり、非常に役立つことになったのである。

(3) 下関における騒然たる出発準備

4日、下関に到着してみると、呉や下関の各航路啓開部の掃海艇が次々と下関市の唐戸栈橋に集結しつつあった。間もなく田村航路啓開本部長以下幕僚の一行も、東京から西下して部隊に合流し、翌5日には予定の掃海艇全部が集合した。

早速、全掃海隊の指揮艇「ゆうちどり」に各艇長以上及び幕僚が集合して、第1回指揮官会議が開かれた。先ず田村航路啓開本部長から説明を受けたところによると、10月6日、占領軍命令が日本政府に出され、運輸大臣、海上保安庁長官を経て航路啓開本部長に命令が伝達されることになった。その内容は「日本政府はできるだけ多くの掃海艇を以て新たに掃海部隊を編成し、朝鮮海域の現地米海軍指揮官の指揮下に入れよ」というものであった。また、これに先立ち10月4日に米極東海軍司令部より田村航路啓開本部長に対して「日本掃海部隊は日の丸の代わりに国際信号旗のE旗を掲げること」が指示されたということである。95.66部隊というのは作戦指揮上の米海軍の部隊区分としての呼称である。それを聞いて、各艇長の頭の中に、今回の掃海作業は朝鮮海峡の浮流機雷掃海ではなくて、朝鮮戦争そのものに参加させられるのではないかという疑問が、不審と不安のうちに閃いたのは当然のことであった。

当時、掃海に関する米極東海軍司令部との交渉には田村航路啓開本部長が誰も伴うことなく、単独で行うのが習慣となっていたので、田村本部長に対する各艇長からの質問が続出して

「掃海はどこ海面をやるのですか」

「朝鮮の現地米海軍指揮官の指揮下にはいるということは、朝鮮戦争に参加させられるのではないですか。そうすれば憲法違反ではないですか」

「北緯38度線を越えるのですか。越えないのですか。越えるとすれば我々は参加できない」などと議論百出の有様であった。これに対して田村本部長は内々実情を承知していたのではないかと私は推測するけども

「作戦上の危険な場所には入らない。安全な場所だけの掃海であることを米極東海軍司令部と確約してある」

などと説明しながら極力慰留に努めたが、艇長達はなかなか心から納得しようとはしない。

「もしそうなった時はどうするのですか」

「思わぬ事故が起こった時はどうするのですか」

などと言って興奮している。会議の後も

「何のために朝鮮戦争に行つて掃海をしなければならないのか。しかも第3国との紛争に対する米軍の作戦行動ではないのか。朝鮮戦争の掃海に行くのは、日本掃海隊の任務ではない」

などとお互い息巻いている。中には艇長以下全員、艇を下りようといって騒いでいる掃海艇もある。私は、行き先は知らなかったけれども、田村本部長の意図を体して与えられた任務を遂行しようとして決心していたので

「いざという時には君たちだけを見殺しにはしない。そういう時には、俺が皆を連れて帰るから安心してついてこい」

と言って説得に努め、また最後の指揮官会議において、田村本部長から

「38度線は越えない」

と明言してから、どうやら各艇長もやや納得して「それでは宜しくお願いします」ということになって、ともかく田村本部長の命令に従つて行動することになった。しかし、これらの会議を繰り返している間にも岸壁では掃海艇乗員の家族が来て騒いでいた。掃海隊が朝鮮に出動するらしいということを伝え聞いた一部の乗員の家族がこの下関までかけつけてきたのである。下関の唐戸棧橋に横付け中の掃海艇から主人を捜し出して

「アンタ船を下りて！！朝鮮には行かないで頂戴、掃海隊を辞めてうちに帰って下さい」

と涙ながらに夫人達が主人に訴えているのである。主人の胸にすがりついて、日本の戦争は終わったのに今更外国の戦争に参加することはないと掻き口説いているのである。ある夫人の如きは、赤ん坊を抱いて駆けつけてきて、掃海艇が朝鮮に行くのなら、あなたはどうしても掃海艇を下りてくれと言ってきかない。

「どうしても行くと言うのなら、この子を海に捨て、私も死にますッ」

と悲痛な声で息巻いて艇摺らしている夫人もいた。艇員仲間や艇長達が説得を重ねてようやく夫人達に諦めてもらい、その場を取めたのである。

終戦後だというのにまた外国の戦争に参加するのか。また命を的に戦うのか。もうそんなことはこれっきり止めてもらいたいということは、家族にとって偽らざる心情であろう

と推察すると、家族達の気持がかわいそうでならなかった。

当時、世間では挙げて戦争を嫌い、日本は戦争をやったからこの敗戦の苦しみに喘いでいるのだという風潮に満ちていた。

掃海隊員としても「日本は新しく成立した憲法によって戦争を放棄したのであるから、今更他国の戦争のために危険な処に生命をさらしに行く理由はない。更には我々はもう軍人ではなく国家公務員であり事務官である。日本再建という使命だけを担って国内の掃海作業に献身的努力を致しているのである。外国の掃海をするために戦場に行くというのは納得致しかねる。しかし占領軍の命令とあれば！日本政府としてはこれに従わざるを得ないのではないか」というのが全隊員の感情であったようである。

最後の作戦会議で次のように特別掃海隊の編成が行われた。

特別掃海隊編成

1 各指揮官

総指揮官 元海軍大佐 田村久三
第1掃海隊指揮官 元海軍中佐 山上亀三雄
第2掃海隊指揮官 元海軍中佐 能勢省吾
MS03 艇長 大西慶治 MS06 艇長 有山幹夫
MS14 艇長 石井寅蔵 MS17 艇長 松本嘉七
第3掃海隊指揮官 元海軍中佐 石飛 砦

2 部隊編成

隊区分	隊番号	所属艇	備考
全般指揮官	0	MS62 (ゆうちどり)	1 第3掃海隊は準備出来次第出発することとし、この日は集合していない。 2 MSは掃海艇、PSは巡視艇を表し、数字は各艇の固有番号を表す。
第1掃海隊	1	MS4隻 PS1隻	
第2掃海隊	2	MS03,06,14,17 PS02,04,08	
第3掃海隊	3	MS5隻 PS3隻	

(4) いよいよ下関を出勤

間もなく米第7艦隊司令官からの命令が届いたとして田村総指揮官からの伝達があった。即ち「10月9日0000(午前零時0分を示す海軍式表示法)までに、〇〇地点(朝鮮海峡上のある地点、田村総指揮官のみ承知)において、米海軍部隊と会合し、その教導によって行動する」というのである。

とにかくいろいろと混乱や動揺はあったけれども、10月8日早朝、田村総指揮官乗艇の「ゆうちどり」を先頭に第2掃海隊7隻がこれに続航して、静かに下関の唐戸棧橋を出港、

下関海峡を西に向かった。各艇とも国際信号旗のE旗を艦尾に掲げながら。

第1掃海隊は別命によって山上指揮官がこれを率い、10月7日、下関を出港して朝鮮半島西岸の仁川方面に向かって出ていった。

私はMS03掃海艇に乗艇していたが、一同緊張した面持ちで何となく開戦前夜のような雰囲気包まれ、前途にどんなことが待ち受けているかわからないままに、多少の不安を抱きつつも運を天にまかせて、陸上の民家はまだ眠りから目覚めてはいないだろうなあと思いつつ小舟ほか殆どなく、下関海峡西口掃海水道を抜けて朝鮮海峡へと出ていったのであった。いよいよ外海にでてみると北東からの季節風が吹いていて小舟の掃海艇にとっては波も大きくグラリグラリと前後左右に揺れ始める。老朽化した小さな木造艇7隻を引き連れて、朝鮮海峡を横断するだけでも大仕事である。しかし次第に船乗り気分が出て、外海の航海に乗員の気分もややリラックスして掃海作業の煩雑なことなどは一時忘れる。やがて日もとっぷりと暮れて夜航海に移る。作戦行動であるので航海灯等普通の航海では出すべき灯火等一切出さず、暗夜の無灯航行である。僅かに近距離の後続艇からだけ見える薄い灯を艇尾から後方に向けて出しているだけである。ブリッジは話し声もなく静まり返っている。

予定通り所定の地点に到達する頃、いつの間にか暗夜の中に数隻の駆逐艦らしきものが近くに現れて、暗夜の中を我々の横から前の方に追い抜いていった。「米駆逐艦が現れたぞッ」という誰かの小声が聞こえる。やがてそれらの駆逐艦は我々の左右両側に護衛するがごとく監視するがごとく付き添った。ここで一つの整った隊形ができて航進が始まる。どこへ行くのであろうか。田村総指揮官は行き先を知っているのであろうか。知らないのではあろうか。何とも言うてこない。ブリッジには第2掃海隊指揮官の私の他に大西艇長、当直士官、操舵員、見張信号員がいるが、誰も話をする者もなく黙然として「ゆうちどり」の跡を続航していく。ようやく夜が明けると米駆逐艦から「ゆうちどり」に対し書類が投げ渡されたようである*1。

四周は海ばかりで何も見えない。朝鮮の山も見えない。各艇離ればなれにならないように前続艇の跡をしっかりとついて、ひたすら北へ北へと航行している。どうも我々は朝鮮半島の東岸を北上しつつあるようである。どこまで行くのであろうか。日本海の季節風による北からの荒波に揺れながら、約8節程度の航進が続く。こうして再び日が暮れて夜航海に入る。やがてブリッジで

「おい北緯38度線をとうとう突破したぞッ。これは大変なことになるぞッ」という声がかかる。かといってどうすることもできない。各艇小なりといえども肅然として隊伍を組んで航進しているのである。ただ我々の日本特別掃海隊が、米海軍の95.66部隊として作戦部隊の中に編入されていることが何となく皆の胸につかえているのである。

(5) 元山沖に到着掃海作業の開始

10月10日、夜が明けてみると遂に元山沖付近まで来ていたのである。遙か沖合の方に米第7艦隊らしい戦艦、航空母艦等がずらりとならんでいるのが沖合遠くに見える。我々

く心も静まり落ち着きがでてきてようやく眠りにつくことができるのであった。夜が明けると。こんな小さな木造艇では勿論顔を洗うこともできない。起き上がるとそのまま直ぐブリッジに上がるだけである。

気がついてみると碇泊中の米艦船が遙か遠くに見える。風のために一晩のうちに元の位置から10哩以上も南の方に押し流されているようである。随分流されたものだなあと驚いて、早速機械を発動して一時間位もかかって元の位置「ゆうちどり」の近くに復帰するとバラバラに散っていた各艇も逐次集まってくる。こういうことがそれから毎晩続いたのであった。

10月11日先ず第1日目の掃海作業として掃海区域の設標を綿密に六分儀で位置を測定しながら実施し、次いで泊地の磁気掃海*2を開始する。

この泊地掃海は敵の機雷堰設置の情報を別図第1によって米軍から知らされてはいたけれども、水深は深いし機雷が敷設されている虞があるという程のものではなく、敷設されていないけれども念のため掃海を実施する程度のもものと判断し、楽な気持ちで掃海を実施したが、特別のこともなく所定どおりに作業は進捗していった。

港湾付近の米駆逐艦は依然として連日朝から日没まで陸上砲撃を実施していて、その発砲の音が遠くから聞こえてくる。第7艦隊主力部隊も遙か沖合を遊弋して威圧しているかのようである。

夕刻泊地掃海の一部を予定通り終了し「ゆうちどり」に集合、各艇横付けにした。田村総指揮官は本日の掃海結果の報告と翌日の掃海指令を受けるために、スミス少将の処に行った。スミス少将は米軍の前線指揮官でもあったのである。

田村総指揮官は帰艇すると直ちに艇長以上を「ゆうちどり」に集めて作戦会議を開き、重大な命令を受けてきたと言ってそれを発表した。即ち「明12日の予定を変じて0700発動し米掃海艇4隻は掃海を行いつつ永興湾内に侵入し、奥にある元山港前面の泊地掃海を行う。日本掃海隊は処分艇となってこれに続行せよ」というものであった。私は作戦指令に基づき部下第2掃海隊をMS03、同17、同06、同14の順に単縦陣となし米掃海艇4隻の処分艇となってその後を続航することを決めた。

(6) 永興湾内に侵入、米掃海艇の触雷沈没

いよいよ10月12日である。私は早朝行動を起こし第2掃海隊4隻を率いて午前7時米掃海艇の近くに集合した。ところが私が見て驚いたことには米掃海艇は在来型の鉄製の掃海艇ではないか。鉄の船体では磁気機雷にかかればひとたまりもなくやられてしまうことは明白である。特に近頃は機雷と言えば磁気機雷が世界的にも常識となっているのではなからうか。元山港が多数敷設して防御されているということは確実であり、ソ連製の機雷がもしあるとすればどの程度進歩しているかは不明であるとしても、磁気機雷である可能性は多分にあるはずである。私は米掃海艇を見て「これは危ない。きっと敵の機雷にやられるのではなからうか」と思ったのである。それと同時にあの掃海隊の司令や艇長がそういうことを知らない筈はなからう。「やられることを覚悟の上で永興湾内に乗り入れようと

するあの艇長偉いなあ」と米掃海艇のブリッジを見上げながら私は独りつぶやいたのであった。もし触雷したら予測できた無駄な損害を被ることになりかねないのではないか。ひいては米軍の上陸作戦に重大な齟齬を惹起することになるのではないかと思いつつも、しかしもう命令は出されてこれから出発しようとしているのである。止むを得ないのであろうと気の毒に思ったのであった。あとで知ったのであるが、米軍の掃海艇は日本占領の目的を達成すると共に殆ど総てが米本土に帰還してしまっていて、この方面の作戦に使用し得る米掃海艇は鉄製のこの4隻の旧式掃海艇しかなかったということである。

米掃海艇4隻は0700いよいよ行動を起こし単縦陣となって悠々と湾口を目指して航進していった。我々掃海隊もその後方500m位を続航しながら陸上砲撃中の駆逐艦の側を通り抜けて麗島と玄島との間の湾口に差しかかった。速力約6節。先ず敵機雷堰の第1線があるかも知れないと予想される場所である。私は先ず「リモートコントロールとなせ」の旗流信号を揚げて各艇に注意を喚起した。米掃海隊は無事にこの湾口を乗り切って湾内に侵入することができるであろうか。後から米掃海隊を注視しながらその後方に続いて我々も湾口に入っていく。何時触雷して爆発が起こるかも知れないと思いつつ。見ていると静かに湾内に侵入していく。しかし何事も起こらない。どうやら米掃海隊は機雷堰予想の第1を突破したようだ。よしッ 次は我々の番だ。米掃海艇4隻が通過したからと言って安心はできない。機雷は回数起爆装置がついているかも知れないし、また係維機雷があるかも知れない。木造ではあるが日本掃海艇の方が米掃海艇より喫水が深いのである。そのほかどんな種類の機雷があるかも知れない。もし、ソ連が北朝鮮に武器援助しているとすれば、ソ連海軍は昔から機雷については研究の進んでいる国でもある。油断はできない。陸上からは何の反応もなく静まり返っている。

我々の掃海艇は後部の方の喫水が深くエンジンも後部にあるのでもし触雷するとすれば後部の方が可能性が大きいので触雷した時の被害を最小限に止めるために全乗員は艇の前部に集結させてあった。船橋にある者は皆無言のまま緊張した面持ちで何となく冷え冷えとした感じである。我々も逐次湾内へと進入していく。何事も起こらない。どうやら機雷堰の第1線を突破したようである。何となく内心ホッとする。湾口には機雷が敷設されていないのかも知れないと思った。続いて第2線、第3線の予想される機雷堰を目標にこれらを通り越えるべく永興湾の中央部へ進入して行った。左側で湾口を形作っている麗島の裏側は丘陵になっているが、人影もなく家もない禿げ山が続いていて何事もなく静かである。右側の玄島は少し小さい島で施設らしい物も何も見えない。いよいよ湾内の中央に進んでくると島や陸地が遙かに遠く広い海面となって何となく安心感が出てくる。

永興湾の中央付近に薪島があって奥の元山港を画している。先頭を進んでいた米掃海隊の一番艇が薪島の手前に差しかかった時であった。突如として爆発が起こった。1番艇の後部付近から水柱がマストの高さ位に上った。やった！！ドーンという低い爆発の轟音と共に艇尾が高く持ち上がりまた低く下がったり二三回上下に揺り動いたとみる間に次第に艇首を持ち上げ遂に空高く逆立ちとなったかと思うと真逆様のままずぶずぶと海中に没

してしまった。眼前におけるアッという間の出来事であった。爆発と同時に薪島の方から敵の砲撃が始まった。

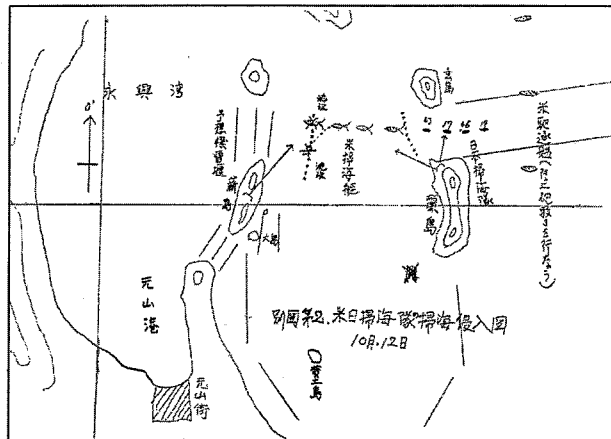
これを見た2番艇は直ちに取舵に（左側に）転舵横向きとなって薪島に対して砲戦を開始した。と思った途端に今度は2番艇の右横腹でまた爆発が起こり水柱が立ち上った。二三回左右に揺れ動いたかと思える間に右の方へ傾きはじめ遂に横倒しとなって、そのまま波間に沈んで何も見えなくなってしまった。これも瞬間的出来事であった。

3番艇、4番艇はその位置に停止して薪島に対し砲撃を開始した。従って我々も単縦陣のままそこに停止した。まもなく3、4番艇から交通艇が降ろされて遭難者の救助作業が開始された。その内に港外から大発型の機動艇が数隻駆けつけてきて沈没艇の救助に向かって行った。やがて負傷者等の多数の乗員を乗せて湾外に向かって引き上げて行った。3、4番艇はその後砲撃を止めて反転し、我々の横を通り抜けて湾外へと出ていって、今度は湾外の近距離から湾口付近の海岸に対して砲撃を始めたがその付近には人影は見えないようであった。

その頃には救助作業も終わり機動艇等も全部湾外に引き上げて行ったので我々の掃海隊も当初は機械を後進に回して静かに後退していたが、後反転して最後に湾外へと出ていったのである。結局この日の侵攻作戦は米掃海艇を2隻喪ったまま全軍湾外に総退却してしまった形となってしまったのである。

ちょうど夕方となり我々は「ゆうちどり」に集結横付けして田村総指揮官に詳細を報告したところ、総指揮官は米掃海艇が触雷したその機雷は磁気機雷であったと判定^{*3}してこれをスミス少将に報告した。（別図第2参照）

その翌日からは以前の態勢に戻って、米駆逐艦による陸上砲撃を強化して繰り返すこととなり、我々日本掃海隊は再び沖合の泊地掃海を続行することとなった。夜は漂泊して一晩のうち10哩以上も南に流されては翌早朝元の位置に戻り、昼間は終日泊地掃海という日課を繰り返すことになった。この日課を繰り返しているうちに16日に至って韓国海兵隊が上陸して元山街の付近まで敵の掃討を終了したという情報が入った。その夜、次の作戦が指令された。即ち



「米軍は元山港から上陸することを取り止め、湾口を入れて直ぐ南に折れて黄土島の前面の海岸に上陸することに計画を変更した。よってこの海域の西半分を米掃海隊を以て、東半分を日本掃海隊を以て明17日よりその掃海を行え」ということであった。この海岸は望遠鏡で見た時、砂利の海岸で上陸に都合のよい広い砂浜を形成しているように見えた。

敵は当然上陸阻止のために陸上には防御施設を築き、海中には機雷等を敷設しているかも知れないと思われた。

(7) 湾内掃海と MS14 号の触雷沈没

右作戦計画に基づいて10月17日早朝より先ず行動を起こし、米掃海隊とは別行動となり、第2掃海隊を率いてこれを単縦陣となし再び単独となり永興湾に侵入していったのであった。危険が予想されたので旗流信号と共に各艇に「遠隔操縦を徹底せよ」の手旗信号を送った。先ず湾口の機雷堰予想の線を冷え冷えとした気分で乗り越えて湾内所定の海面、麗島の北西端に到着した。私は MS03、同 17 を以て第 1 小隊、MS06、同 14 を以て第 2 小隊に区分して先ず磁気掃海*4を行うこととし、各小隊ごとに各々対艇となって掃海索を海中に入れてこれを曳航しながら第 1 小隊の左側に第 2 小隊を置くいつもの隊形をつくりこれを指揮して掃海を開始した。先ず麗島に最も近いところから掃海を開始し、あと逐次西方に掃海区域を拡大していこうと計画したのである。従って、この掃海隊形では MS14 が最も陸地に近く位置することになったわけである。

駆潜特務艇を改造した我々の掃海艇はもともと外洋に出る漁船型に造られているので船体の割に喫水が深く特に後部の方は 2.8m 位もあるので後部の方が触雷の可能性が高いと考え、各艇共乗員は艇の前部に集結して、もし触雷の際は少しでも被害を少なくするように心掛けていたのである。

掃海電纜によって処分される機雷*4の爆発或いは触雷による掃海艇自体の爆発が何時起こるともわからないので、皆緊張した面持ちに包まれていた。上陸阻止用の機雷といえども何れも磁気機雷に限らない。深度を浅くして上陸用舟艇に対する普通の係維機雷もあるかも知れない。臨時に作製した手製の機雷でも有効である。

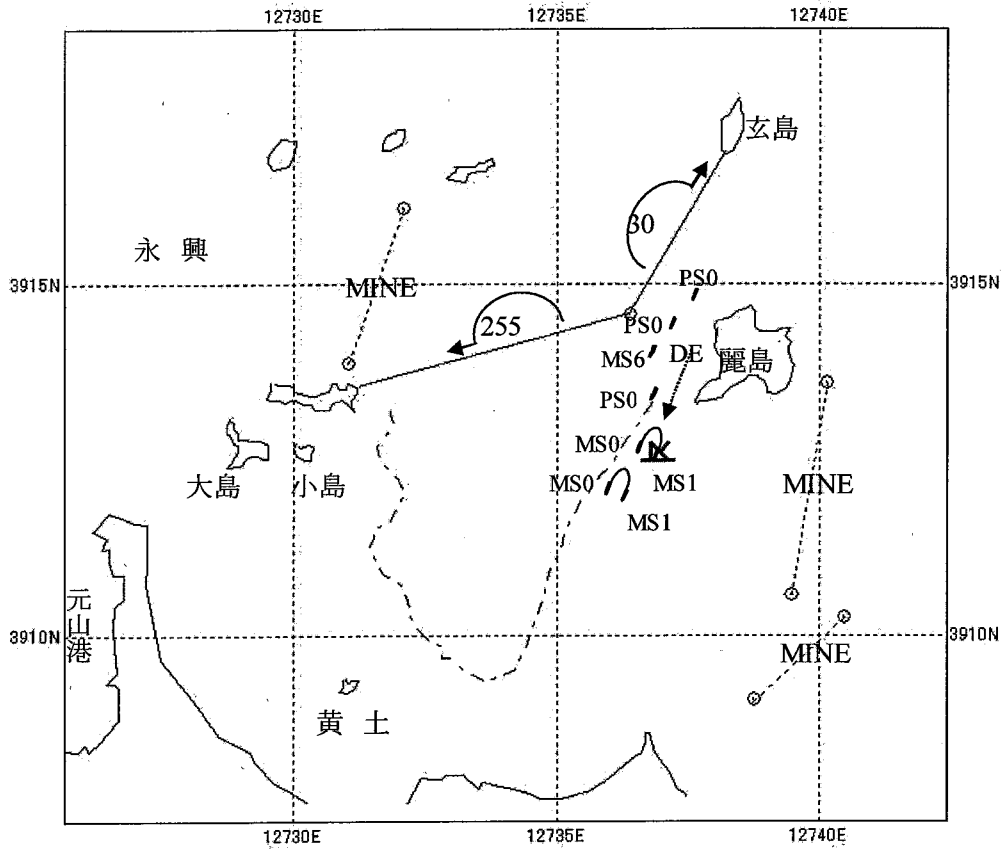
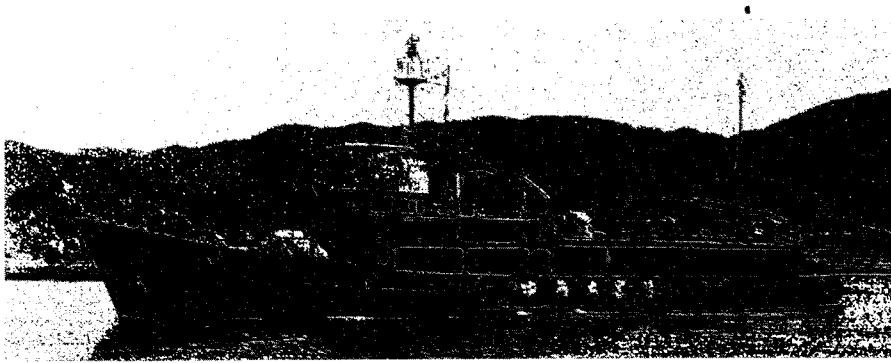
湾内の静かな海面を掃海しながら航進し午後もそのまま作業を継続して、左側の麗島の前面を通過し終わろうとした時、ちょうど午後 3 時 21 分海岸に最も近い位置にあった MS14 号が突然爆発した。

ドーン！！という低い轟音と共に私がハッとと思って振り向いた時には煙とも水煙ともわからない薄黒いものが瞬間的に広がって、辺り一面の海面上を覆って何も見えない。少し時間が経ってその煙がようやく消えて付近が少し見えるようになった時には既に MS14 の姿はなかった。遠くから見ると木片か人の頭かわからない黒い物が点々として海面に浮かんでいるだけであった。全く瞬間的出来事で MS14 は木端微塵となって霧散し轟沈したものと私は思った。

私は轟音を聞いて「しまった！！」と思い、直ちに「掃海中止、掃海索を揚げ救助せよ」と各艇に指令した。MS03 においては、私から掃海索を揚げたら搭載している小さい伝馬船を降ろして救助に向かうよう艇長に指令したけれども、掃海電纜を揚収*4するには時間がかかるのである。ようやく掃海電纜を揚収*4し終わる頃には米軍の機動艇が数隻駆けつけてきて救助に当たってくれたので、伝馬船を降ろすことを止め掃海艇 3 隻を率いて、我々の掃海した湾内に入泊していた総指揮艇「ゆうちどり」に帰投横付けして田村総指揮官に

詳細報告したのであった

「多分多数の死傷者が出ているのではなかろうか」と残念に思いながら、後で聞いたところによると重軽傷者18名、行方不明者は烹炊長1名ということであった。中谷烹炊長は始め皆と一緒に掃海中前甲板にいたそうであるが、何を思い出したのか途中で一人トコトコと後部にある烹炊室の方へ駆けていったところ、ちょうどその時、艇の後部が触雷して爆発し行方不明になったということである。また乗員の中、助かった者の一人の話によれば爆発の瞬間は何も分からず無意識になってしまっていて、気がついた時にはいつの間にか泳いでいたという。また、ある者は沈没までには時間があったので近くにいた者に注意を与えながら静かに海中に入ったとも言っている。



(8) 掃海を中止、下関に帰投

各艇が「ゆうちどり」に集合、横付けした時には既に夕刻になっていた。各艇長からは喧々憺々の意見がでてきた。

「米軍の戦争にこれ以上巻き込まれたくない。掃海を止めて日本に帰るべきだ」「出発前の下関における総指揮官の説明とは話が違う」等々である。

各艇長、誰も引き続き掃海をやろうという者はいない。議論は沸騰するばかりである。そこで、このままでは議論も決着がつかないと思ったので、私は一時、問題点を他に転換して冷却期間を置きたいと思い、一つの提案を行った。即ち各艇長を集めて「米軍の機動艇や交通艇等を借用して小掃海^{*5}をやり、そのあとを我々の掃海艇で掃海する法を検討してみようではないか」ということを提案、説明したが、各艇長は既にこれ以上掃海を実施したくない方向に傾きつつあって、この提案に対してもなかなか納得しようとしなない。私は半強制的に話を纏めて、田村総指揮官に進言し、小掃海を行うために米軍の機動艇か交通艇を借用してもらうことをお願いした。ただしこの方法は実現したとしても長時間を要し、米軍の上陸作戦を大幅に遅らせる虞があると思われたので適当な方法であるとは思っていなかった。その夜、田村総指揮官は非常に心痛懊悩して一晩中眠れなかったということである。

翌朝早く田村総指揮官は遂に意を決して、小掃海実施について打ち合わせのため、司令官スミス少将を訪問したところ不在であったので、米海軍掃海部隊指揮官スポフォード大佐と会い小掃海の件について交渉したところ、同大佐は田村総指揮官の意のあるところを良く了解し、米軍の機動艇も貸与して小掃海を実施することに協定が成立した。間もなくスミス少将より田村総指揮官あて直ちに来艦せよとの連絡が届いた。田村総指揮官は何事であろうかと取り敢えず再びスミス少将をその旗艦に訪問した。会見の後退出してきた時の田村総指揮官の顔色は蒼白であったという。帰艇して直ちに各艇長以上の指揮官を集め説明したところによれば、スミス少将の指令は「今から小掃海をやるだけの時間的余裕は無い。また貸与するような小舟艇もない。米軍の上陸予定日からは既に遅れているのである。従って小掃海の計画を取り止め、当初予定したとおりの計画で速やかに掃海を継続せよ」ということであった。

次のことは当時私は全然知らなかったことで、近年になって当時の艇長であった一人から聞いて初めて知ったことであるが、田村総指揮官は直接各艇長と一人ずつ個別に面接し、スミス少将からの意向であるとして、掃海を継続するかどうか「イエス」か「ノー」で回答せよと求めた。後で各艇長集まってみると偶然にも全艇長が「ノー」と答えていたことがわかった。田村総指揮官はその旨をスミス少将に返事したとのことである。

しかし、このままこの海域の掃海を続行すれば、また犠牲者を出すことは必至であると予想され、掃海を中止して日本に引き揚げるとすれば作戦中のことであるから米軍の取り扱いによっては、或いは重い刑罰を受けることがあるかもしれない。私は艇長達に対して「何とか方法を考えて掃海を続行することを考えようではないか」と説得を試みてみたが、

各艇長とも強硬でなかなか耳を貸さない。艇長の意見は各艇乗員の意見をも代表していたのであった。そのうちに各艇長とも掃海を止めて日本に帰る腹を決めてしまった。私としては万事窮すである。

掃海隊員は国家公務員として一般事務官と同等の待遇であり生命の危険を犯して任務を遂行する義務がないため、これも命令するわけにいかず、ただ日本における掃海だけは僅かの掃海手当を貰って掃海の危険性を承知の上でこれに立ち向かっていたが、これには日本再建という高い使命感があったのである。差し当たり適当な掃海法も見当たらず、これ以上掃海を強行継続すれば、また犠牲者を出すことが多分に予想されたので、私はもうこれ以上犠牲者を出すべきでないと決心し、遂に元山における掃海を中止するの止むなきに至った。遂に私は部下各艇長と運命を共にし、何れは全責任を背負っていこうと決心し、田村総指揮官に対し部下掃海艇3隻を率いて日本に帰投したい旨を申し出たのである。田村総指揮官も止むを得ずとして、これを受け入れることになった。総指揮官からは私に対して「君は残らないか」との勧奨があったので内心残ってもよいという気持はあったけれども、自分の指揮下の掃海艇全部が日本に帰るというのに指揮官だけが居残るわけにいかないと思い、かつは、当初下関を出発するに当たって「何か事が起こった時は、俺が皆を連れて帰るから安心してついて来い」と約束した手前もあり、総指揮官の厚意を辞退したのであった。

田村総指揮官と司令官スミス少将との最後の交渉において、スミス少将から「日本掃海隊は明朝 0700 出港して掃海を続行せよ。しからずんば日本に帰れ。その 15 分以内に出なければ砲撃する」*6 ということが田村総指揮官から伝えられた。私は砲撃するとは何事ぞ、と内心憤激すると共に「撃つなら撃ってみろ」という気持になり、即刻出港して日本に帰ろうと決心したのであった。米軍の指揮下にあつて米軍作戦命令に違反しての行動をとろうとするのであるから、後の処罰については、勿論覚悟のことであつた。機関故障のため「ゆうちどり」に横付けしたまま、修理中であつた MS17 号掃海艇を MS03 号掃海艇で横抱きにし、後に MS06 号掃海艇を率いて 18 日 1400 日本に向けて静かに永興湾を出港したのであった。「ゆうちどり」には「掃海隊は日本に帰投すべし」という命令が旗流信号で揚げられた。無断帰国にならないように田村総指揮官の配慮であつたと思うのである。

スミス少将の旗艦である巡洋艦の近くを通り抜けて湾外に出ると、米第7艦隊の艦船が多数停泊していた。その中に日本掃海隊の補給を担当していた補給艦ルーズベルトがいた。掃海隊が日本に帰投する際は、その艦から燃料の油等の補給を受けていこう田村総指揮官から指示されていた*6。我々が永興湾口を出て南に針路を向けた時、そのルーズベルトの前甲板から「オーイオーイ」とこちらを呼んで手を振っているらしいのが遠くに見えたが、日本に帰投するまでの燃料は各艇とも十分に所有していることを確かめたので、米軍の言動に不快を感じていた時でもあり、これを無視してそのまま永興湾外を南下して下関に向かった。

ようやく夕闇が迫ろうとしている頃、永興湾の山々を遙か右手に眺めながら寂寞とした

気持で航行している時、突然湾内の方に黒煙が高く上るのが見えた。確かに昨日我々が掃海した海域の方向である。その黒煙の上り方を見て、これは何かの船が触雷したのではないかと咄嗟にそう思ったのである。後日帰国した後に、ちょうどその頃韓国の掃海艇か砲艦が1隻触雷沈没したということを知り、あの時の煙は、その時の煙に相違ないと今でもそう思っている。

その頃、石飛缸指揮官の第3掃海隊が編成されて、元山に向け北上中のはずであったので、どこかで石飛隊と遭遇するかもしれないと予想しながら朝鮮東岸を南下中、二日目の真夜中、左の方約500m位を北上中の第3掃海隊を発見した。第3掃海隊より「如何せしや」と発光信号があった。「我下関に向かいつつあり。安全なる航海を祈る」と信号を交換しつつ詳しいことを伝える暇もなく航過してしまった。

翌10月20日、出発した時の下関の唐戸棧橋に到着した。私はその夜特急列車で単身上京し翌日東京着、海上保安庁長官や航路啓開本部長代理等諸官に報告したのであった。その後二三日の後、米極東海軍司令部から第2掃海隊指揮官の私と3名の艇長は、航路啓開部隊から排除せよ、という指令があつて退職したのである。

その後、元山においては、石飛指揮官の第3掃海隊は米海軍より大事にされて、良い待遇を受けたということである。

(9) 特別掃海隊の結末

元山においては、掃海、その他の準備を完了して米陸軍が元山に上陸したのは、10月26日であった。上陸の時期があまりにも遅れたために米軍の作戦としては全く意味がなくなってしまったのである。掃海作戦が予定通り進捗しなかったために、あの大部隊の上陸作戦が何ら意味なく終わったことは作戦計画上大いに反省しなければならないことである。

朝鮮西岸の仁川方面に向かった山上指揮官の第1掃海隊は、潮の干満差の大きいことで有名な仁川方面各地の掃海を現地米海軍の指揮の下で、次々に完了していった。

その後、この特別掃海隊は数次にわたって掃海隊を編成しては朝鮮に派遣され、元山、仁川の他、海州、群山、鎮南浦等の掃海に従事したが、何れも国連軍が占領した後の韓国各地域の掃海であったために、何れも順調に掃海作業を終了して日本に帰投し、任務を終了して12月15日、その編成を解かれたのであった。

その後は掃海艇は再び日本沿岸の掃海作業に復帰したのである。旧海軍将校の公職追放の件は、その後、幾たびか延期されているうちに日米講和条約が成立して我が国が独立したために自然消滅となり、海上自衛隊が創設されると共にその中に編入されて掃海業務は今なお継続されているのである。

5 航路の安全宣言

戦後処理としての日本沿岸の掃海作業は、当初占領軍の責任において実施してきたのであるが、昭和26年10月8日、その責任を日本政府に移管されることになった。それと同時に、掃海を完了して総ての船舶が安全な港になった或いは航路になった旨を全世界に告示する安

全宣言は、初め米極東海軍司令部から発表されていたが、掃海の責任が日本政府に移管されてからは日本側の責任において掃海を完了し、安全宣言も海上保安庁が所掌して日本政府が世界に対して発表することになった。

終戦後掃海作業を開始して以来、各港湾都市では早く物資を輸（移）入するために、外国船舶ができるだけ早く出入することができるように、安全宣言を急いで貰いたいという要望が逐次強くなって、日本政府に掃海の責任が移管されるころには、その要望と共に政府に対する運動もまことに熾烈になっていった。

昭和24年1月、先ず最初に関門港の安全宣言を行って以来、昭和27年5月までに約180箇所の航路や港の安全宣言を行い、航路の航行や港への出入を一般船舶に対して解放したのである。

こうして逐次、港の掃海を完了する度に安全宣言を行い、それによって船舶が自由に日本の各港湾に出入できるようになり、日本国民の生活必需物資や産業に必要な資材の輸入が開始され、ひいては日本からの輸出も始まり、日本国民の生活は愁眉を開き、産業・経済復興・発展に向かって我が国第一の難関を切り開いて、その基礎造りを成し遂げ、戦後我が国発展のために大きな寄与をもたらしたのである。

しかし、これを以て直ちに日本沿岸全部が安全になったわけではない。海中に残存する機雷や危険物は至る所に残っていて、昭和27年、海上警備隊、続いて昭和29年に海上自衛隊が創設されると、これらの部隊が掃海作業を引き継いで、現在なお航路啓開業務を継続実施しているのである。広い海面の掃海は大体において終了したので、近年は特に狭域或いは浅海面の掃海に重点を移して、沿岸全部の安全のために海上自衛隊は活躍中である。

6 掃海殉職者

終戦以来、この困難と危険に満ちた掃海作業中に不幸にして殉職した人は77名の多きに及び、日本再建・復興のために尊い犠牲者となったことを国民は忘れてはならないと思うのである。

昭和27年頃までに相次いで各航路や港湾の安全が宣言されて、船舶の出入りが自由となり物資の輸入が開始されると航路啓開作業の重要性が深く認識されるようになり、掃海関係者に対する深い感謝の現れとして全国32の港湾都市の市長が発起人となり、昭和27年6月、掃海縁の地である四国琴平の金比羅宮の神域象頭山の参道中腹の右側にある広場に「掃海殉職者顕彰碑」が建設された。その慰霊祭は5月27日、毎年盛大に執行されているのである。

あとがき

- 1 太平洋戦争の終戦処理作業において、この掃海作業ほど長期にわたり日本復興のために偉大な貢献をなし、しかも大きな犠牲者を出した作業は他にあるまいと思うのである。犠牲となった人々は、戦後のことであるので、戦死の取り扱いを受けることもなく、何ら報いられることなくして静かにこの世を去っていったのであって、ただ僅かに琴平宮の境内

に顕彰碑が建てられているだけである。願わくは全国民が、今日の我が国の繁栄をもたらすために、その礎石となって逝った人々のことを永遠に忘れないようにして貰いたいものである。

私は熱願したい。掃海殉職者に対して、今からでもよいから特別の計らいをもってせめて戦死と同等の叙勲の光栄に浴させていただくよう関係方面で取り計らって貰いたいと切に思うのである*7。

六分儀と三棹分度器と磁気コンパスだけであらゆる障害を乗り越えて、この精密作業を成し遂げていった掃海隊員は実に精鋭な船乗りであったと思うのである。

2 朝鮮戦争中、最初に元山に出動した日本特別掃海隊第2掃海隊の事件については、再び起こることのない珍しい事件であると思うので、次にその教訓と反省すべき事項について述べてみたいと思う。

(1) 生命を賭して遂行しなければならないような重要にして、かつ、危険な作業を国家公務員に命ずる場合には、政府はその命令が実施しやすいようにあらゆる措置を講ずるべきであると思うのである。即ち政府は実施する者に対して使命感を与えて自覚を促し、目的を明らかにし、かつ、それを達成し得るような身分を与え、戦争に参加する場合には、待遇や犠牲者がある場合の措置等考慮し処置すべき事項は多々あると思うのである。実施する部隊としては、それに基づいて事前の研究、準備、訓練を十分に行い、精神力を喚起して初めて実行に移すのが当然であると思う。軍隊においてさえ左様行ってきたことは、過去の実例で明らかである。

しかるに、この特別掃海隊の場合は、その使命や目的のみならず、行き先さえも知らされず連れていかれ、現地に到着してから生命を賭してやらねばならないような作戦作業を突如として命令されても、それがうまく実施されるはずはないのである。殊に軍人ではなく事務官に過ぎない国家公務員としての身分の場合、生命を賭してまで実施する義務がないので、これを強制することができないのである。現地の掃海隊員は義務の範囲を越えて、米軍命令の実行に努力したのであるが、これにも限度があることは当然であろう。作戦に参加した掃海隊員を事務官たる国家公務員として取り扱うべきか、或いは軍人として取り扱うべきか、日米の間に明確でなかったことは、実施者の掃海隊として真に当惑したことであった。結果としては実施部隊の者だけが責任をとらされて、闇に葬られてしまった。

(2) 昭和53年9月11日、NHKはこの朝鮮に出動した特別掃海隊のことに關して約50分にわたりテレビ放送を行った。その中で私は当時知らなかった重要事項を初めて知らされて驚いたのである。即ち

当時の米極東海軍司令部のパーク副参謀長は、この放送の中で「朝鮮戦争に出動した日本掃海隊は、希望者を募集して朝鮮に派遣したのであり、給料も倍額*8にした」と証言しているが、当時、掃海隊員は希望者の募集ということは全然知らず、全員が占領軍命令であったものと理解し、憲法を超越して政府の命令であると受け取って出動したのであった。政府機関の掃海隊が希望者を集めて出動するということはあり得ないことであると思うの

である。また、最初に出動した我々には給料の増額等待遇の改善は一切無かった*⁸のである。後日になって給料の増額が行われたらしいことを耳にした*⁸。

(3) 同じテレビ放送の中で、当時海上保安庁長官であった大久保武雄衆議院議員は、「当時米軍から事前に連絡があったので、直ちに吉田総理に連絡して指示を仰いだところ吉田総理から『近く日米間で講和条約を結ぶ必要があるから、国連軍には極力協力して貰いたい。ただしこの件は絶対秘密に行うように』との指示があった」と証言しているが、これらについて、掃海隊員には一切説明がなかったのである*⁹。実施する掃海隊員にまで秘密にする必要はなかったのではあるまいか。むしろこれらのことが伝達説明されていたならば、或いは全員が使命感を自覚して違った結果を生んだかもわからないと思うのである。

(編集部注)

*¹ 当時特別掃海隊指揮官付補佐官であった田尻正司氏によれば、旗艦 MS62 は米艦との会合後（昭和 25 年 10 月 8 日 1600 頃）所謂ハイライン別法によって、ORDER を受領、その趣旨は、1 目的地元山

2 全船舶直ちに無線封止、日没後は灯火・音響管制、ビルジ排除及び舷外投棄は日没直後実施し、昼間は禁止する。

3 本艦に続行せよ

であり、この ORDER の内容は、そのまま発光信号によって各艇に送られ、MS62 を先頭に米艦の後に続き、一路元山へと向かったとしている。

少なくともこの時点で、第 2 掃海隊の行き先が元山であることがはっきりしたものとされる。ただし、MS06 号の元信号員 本橋昇治氏によれば、1 項の目的地元山を発光信号にて受信した覚えがなく、「フォローミー」のみだったという。

なお、本橋氏は、いつの時点だったか記憶が定かではないが、唐戸出港までには、永興湾を含み元山までの必要な海図が全て揃っており、また会合点の位置（北緯 35° 東経 130°）からしても元山行きは十分予想できたと述べている。

*² 「朝鮮動乱特別掃海史」P30 第 5 節 特別掃海隊に関連する諸計画 第 7 元山沖掃海実施計画 (25.10.9) によれば、昭和 25 年 10 月 9 日 0900 米掃海隊指揮官から、日本特別掃海隊は元山沖の係維機雷の掃海を行うよう指令を受けたとされている。

*³ 米掃海艇 USS Pirate の触雷報告

Report of Loss of USS Pirate AM275/A16,CEM/rem,Serial: 01A-50,19October1950

(<http://www.history.navy.mil/faqs/faq103-3.htm>)によれば、係維掃海実施中の触雷であり、その 1 分前にソナーが複数の目標を探知したという。ソナー探知（艦首方向 100yds）の数秒後に艦首見張りが敷設深度の浅い機雷（機雷缶）を右舷艦首至近距離に目視発見、これを避航中に、機雷敷設列線を縫うような航跡を辿った形となり触雷に至っている。

*⁴ MS14 号の触雷（係維機雷）は、磁気掃海実施中ではなく係維掃海実施中であつたことが以下の資料等から史実として明らかである。

- 1 「MS14号触雷報告」：「朝鮮動乱特別掃海史」P46 別紙第6
 - 2 海上保安庁における能勢省吾氏からの事情聴取資料「元山における日本掃海船三隻の内地帰投について」：「朝鮮動乱特別掃海史」P52 別紙第8
 - 3 触雷時MS14号の僚艇であったMS06号の元信号員 本橋昇治氏からの聴取
- *⁵ 機動艇や交通艇等を用いた小掃海の提案は、敷設深度が浅くMSにも危害を与える恐れがある係維機雷の存在とこれに対する措置であり、5日間に日米3隻の掃海艇を失ったことに起因する結果でもある。

- *⁶ 海上保安庁における能勢省吾氏からの事情聴取資料「元山における日本掃海船三隻の内地帰投について」：「朝鮮動乱特別掃海史」P53 別紙第8 2(4)によれば、田村総指揮官からの小掃海の申し入れに対する米側の回答は、「日本掃海船3隻は15分以内に帰投して内地に帰れ、然らざれば15分以内に帰投して掃海にかかれ、内地に帰る場合は清水、燃料を補給船より受けよ。」とのことであり、「砲撃する」という言葉がない。

もし、10月18日の田村総指揮官と司令官スミス少将との交渉の場において、スミス少将が「Fire」という言葉を使ったとすると、「砲撃」ではなく「解雇」の意味で使われた可能性が高い。Fireという言葉そのものに「解雇」という意味があり、用例として「You're fired」「君は首だ」があり、口語では一般的な表現のようである。日本特別掃海隊の使用を「契約に基づく労務借上」としていた米軍としては、「掃海を継続しないなら、解雇だ」といったところであろう。ただし、一方、緊迫した遣り取りに通訳を介していなかったとすれば、日本側が「砲撃」と解しても不思議はないであろう。

この件について、元防衛大学校 平間洋一教授は、雇用(Hire)を解除するという言い回し(Off Hire)の中でHireをFire(砲撃)と誤聞したのではないかと「日本の掃海」(航路啓開史編纂会編)第四章 朝鮮戦争時の特別掃海隊P98～99に注釈を付けているが、単純にFireを誤訳したと考えるほうが自然であろう。

何れにせよ「砲撃」と誤訳誤聞したとしても「・・・内地に帰る場合は清水、燃料を補給船より受けよ。」と続けば、海上保安庁における能勢省吾氏の証言に「砲撃する」という言葉がないことも理解でき領ける。

一方、昭和53年11月に記述された本稿、能勢省吾氏の述懐では

『スミス少将から「日本掃海隊は明朝0700出港して掃海を続行せよ。しからずんば日本に帰れ。その15分以内に出なければ砲撃する」ということが田村総指揮官から伝えられた。掃海隊が日本に帰投する際は、その艦(補給艦ルーズベルト)から燃料、油等の補給を受けていくよう田村総指揮官から指示されていた。』

となっており、燃料等の補給については、スミス少将の言葉にはなく田村総指揮官からの指示に変わっている。

- *⁷ MS14号の乗員中谷坂太郎氏の殉職後29年を経た昭和54年秋、戦没者叙勲で勲八等白色桐葉章が贈られた。ただし、勲章の伝達は内輪にして欲しいとの内閣の意向で、新聞発表は取りやめ、大久保武雄氏及び所管の海上保安部長が遺族の家を訪れて伝達したという。

本稿脱稿の翌年のことである。

*⁸ 給与増額の件については、以下のことから昭和 25 年 10 月 6 日以降特別掃海隊隊員に対し周知徹底されていたと思われる。

- 1 昭和 25 年 10 月 6 日 CNFE の C. T. JOY 中将から日本政府（運輸大臣）に対し、日本掃海艇の使用に関し、次の趣旨の指令が出されている。（「朝鮮動乱特別掃海史」P15）
 - a 国連軍最高司令官は、CNFE に対し、日本掃海艇 20 隻、掃海母船 1 隻、巡視船 4 隻の朝鮮水域における使用を認可し、これら船舶の使用に必要な命令を発することを指令した。
 - b 朝鮮水域において、これらの任務につく船舶は万国信号 E 旗（特殊任務）を掲げる。
 - c 朝鮮水域における日本船舶へのロジスティクス支援は米海軍が担当する。
 - d 本任務に従事するものには、2 倍の給与を支給する。

なお、田尻正司氏によれば、同 10 月 6 日下関唐戸岸壁 MS62 号船上における各級指揮官会議の後の夕方 1700 過ぎに、この指令の通知を受けたとしている。

- 2 前 1 項に関連し「政府職員の特殊手当に関する政令第 99 条第 2 項の規定に基く特殊勤務手当の支給について（通知）」では『人事院は政府職員の特殊勤務手当に関する政令（昭和 23 年政令第 323 号）第 99 条第 2 項の規定に基き連合軍の指令により朝鮮特殊掃海作業に従事する職員に対する特別の特殊勤務手当を下記の通り定め昭和 25 年 10 月 7 日から適用する』と通知しおり、昭和 25 年 10 月 7 日から実質的な給料が 2 倍となったことは確かである。

- 3 田尻正司氏によれば、昭和 25 年 10 月 9 日航海中、吉田総理から特別掃海隊全般あて、次の趣旨の電報が届いている。
 - a わが国の平和と独立のため、日本政府として、国連軍の朝鮮水域における掃海作業に協力する。
 - b 特別掃海隊員は、内地出港時から帰投までの間、一時米軍に雇用されたものとみなす。ただし、勤務記録上は、公務員として継続勤務したものとして処理する。
 - c 特別掃海隊員には、基本給の外に、航海手当、危険手当、掃海手当及び被攻撃手当を支給する。
 - i 危険手当は、北緯 36 度以南の場合、本俸、扶養手当、勤務地手当及び航海手当の合計額の 100%、北緯 36 度を超した場合は 150%
 - ii 航海手当は、内地支給額の 2 倍
 - iii 被攻撃手当は、1 航海に 5,000 円

*⁹ 上述吉田総理から特別掃海隊全般にあてた電報には、日本国政府（特別掃海隊）としての使命が、「わが国の平和と独立のため」という目的と「国連軍の朝鮮水域における掃海作業に協力する」という任務で示されている。

当時の海上保安庁長官大久保武雄氏は、著書「霧笛鳴りやまず」P284~285 に次のように記している。

『米海軍司令官からの命令書が、日本政府に届き、山上一番隊と能勢二番隊が、唐戸を出発することとなった。私は先遣部隊の出港前、特別掃海隊の指揮官と船長全員を、旗艦「ゆうちどり」のサロンに集め、

「隊員は千人針も貰っていない。今日の埠頭には、日の丸の旗も、万歳の声もない。心淋しいことと思う。しかし日本が独立して、世界に名誉ある地位を占めるためには、越えなければならない試練がある。手をこまねいては、独立をかちとることは出来ない。どうか諸君は勇躍して使命を果たして貰いたい。諸君の業績に対しては、二十年後、三十年後の日本人が、必ず感謝の日の丸を振るであろう。」

と激励して、海上保安庁長官の出動命令を伝えた。

「独立のために」という私の言葉は、全員の心を打ったようであった。一遍に迷いの吹き飛んだ船長が「出港用意！」と叫ぶ凜とした声を聞いた。』

当時の情勢の下、海上保安庁長官として出来得る限りの説明をし、参会者全員が納得したという大久保武雄氏の自負が窺える。しかしながら、能勢氏は「掃海隊員には一切説明がなかった」と述懐している。また後年、呉での航啓会に出席した元大久保長官に対し、元 MS06 号艇長有山幹夫氏が詰め寄る場面を参会者が目撃している。

これらのことは、立場の違いや辛酸を舐めた現場指揮官との感じ方の違いを如実に表している。